

鎮魂三話

和田孫博

二月に第六十三回卒業式を挙行了。私が校長になって四回目の卒業式である。この学年は中学百八十一名、高校三十九名の入学で、合わせて学則定員ちょうどの二百二十名だったが、卒業時は二百十九名だった。欠けた一名は高一の秋に白血病で逝ったS君である。

S君は、中学入学時は健康優良児を絵に描いたような元気で笑顔が絶えない生徒で、入学後間もなく柔道部に入り、クラスでもクラブでもすぐに人気者になった。当時私はこの学年の担当ではなかったが、その明るい顔は廊下ですれ違っただけでも目に焼き付くものだった。ところが、中学二年が終わろうとする頃、突然の病魔に襲われた。白血病という血液の癌自体はじわじわ進行していたのだろうが、本人や周りの者が自覚するのは突然の体調不良である。町医者での血液検査の結果が良くなく、大きな病院に回され精密検査を受けて病名を告げられた。免疫不良を起こしやすいので、入院隔離して治療となるまではそれほど時間がかからなかった。家族も担任も友だちも狐につままれたような感じであった。経過が芳しくないという時期もあったが、近親者の骨髄移植を受けた結果回復し、中三の二学期から学校に戻れた。毎年二学期後半には中学校の合唱コンクールが行われるが、その年は奇しくも学校創立八十周年に当たり、記念行事の一貫として賑々しくポートピアホールを借り切って行った。四十五名の同級生に交じって大きな口を開けて歌っている彼の笑顔は今でも脳裏に蘇ってくる。中学校の卒業式でも満面の笑顔で卒業証書を私の手から受け取ってくれた。

しかし、身体の中の病魔は完全には駆逐されていなかった。高校一年の一学期半ばに再発と診断され、再度の骨髄移植を含め辛い治療に堪えたが、前ほど効き目がなかった。それでも、一学期の終わりには外泊を許され学校にも顔を出したが、それが最後の登校となった。まだ暑さの残る告別式では、同学年の生徒全員と我々教職員がむせび泣きながら歌う校歌の中、旅立っていった。父君のご挨拶で、S君が最後まで希望を捨てず未来を見据えて病魔と闘ったとおっしゃったのを聞き、また新たな涙が噴き出したのを覚えている。

でも、そのお蔭で、この学年は結束した。生徒会活動、クラブ活動、文化祭や体育祭などの行事、どれをとっても生徒たちの纏まりが際立っていた。中・高六年はそれなりに長く、途中でいろいろな理由で学校に出にくくなる生徒もいるが、この学年に限っては誰一人脱落することなく、残り全員が卒業を迎えた。高一の間だけでなく、高二・高三のときも、生徒たちはS君をどれかのクラスに所属していることにして、

一つ余分に机を入れ、写真と花を置いていた。卒業が近づいたとき、卒業生の氏名を呼ぶ中にS君の名前も入れて欲しいと要請する生徒有志を説得するには少し苦労したが、一番仲の良かった友人が写真を持って舞台上上がることで納得してくれた。私は式辞の中でS君のことに触れ、彼との誓いを守って全員で学校生活を全うしてくれた生徒諸君を讃えた。いつも以上に素晴らしい卒業式であったと思うが、病死であれ何であれ、在籍している生徒を失うことは辛いし、卒業式はそれを思い出さざるを得ない時でもある。



その卒業式の四日前の夜、『とい』XXIで取り上げた私にとって大恩の師である小倉恒夫先生の訃報が届いた。中学校時代英語が嫌いだった私を根気強く指導いただき、教員として母校に戻ってからも背中私を導いて下さった。口には一度も出されなかったが、母校に戻る際も当時の校長先生に強く推薦いただいたことは間違いない。今こうしてられるのも先生のお蔭である。先生の一番の趣味であったゴルフの手ほどきを受け、退職記念にご一緒したスコットランドのセントアンドリュースの海と風の風景は一生の思い出である。ここ何年かは闘病のため入院され話もうまくできない状態だったので、訪ねることもままならず不義理をしていたことが今となっては悔やまれるが、享年は数えの百歳、天寿を全うされたのだと思う。家族葬だったが、私には連絡を下さったご遺族には感謝している。仕事の関係で通夜にしか参列できなかったが、その葬儀で導師を務めたのは、何と私の同級生で、中1の時おそらく一番最初に先生の逆鱗に触れたN君だった。偶々ある宗派の地区幹部をしていたのだが、世の中の巡り合わせというのはそういうものなのだろう。彼も不思議な縁に感慨ひとしおだったようだ。



通夜の翌日、大学の同級生で『とい』の理解者の一人でもある梅原賢一郎君から『不在の空』（角川学芸出版）という書物が届いた。表紙を見ると梅原君は編者で、著者は三年余り前に亡くなった奥様、美也子さんとなっていた。同封されていた送り状には「亡き妻への供養の一つの形です」とあった。読んでみると、この本は二つの様相を持っている。一つは、病気が見つかってから四年足らずで亡くなるまでの美也子さんを中心とする梅原君家族の生き様である。語り手は賢一郎君自身なのだが、それはあくまで編者としての語りであり、中心となっているのは美也子さんが日記やノートなどに書き遺した文である。私の胸が一番熱くなったのは、美也子さんが三人の息子さんと賢一郎君に遺した言葉。特に「パパへ」を目にしたときは私自身に置き換えてみて涙が溢れて止まなかった。

- ・他人の目を気にせず自分をつらぬくこと。
- ・自分は世界一の才能があると思うこと。
- ・一人でいても楽しく過ごせること（一人は自由だ！）。

- ・強い身体をつくること。
- ・女人禁制ではありません。

もう一つは、美也子さんの遺作集の様相。三人の息子さんや賢一郎君の顔のスケッチは独特のタッチで印象的だ。その後にある息子さんたちがお世話になった洛南高校元校長の後藤善猛先生への書簡とその返事（実際はノートに書かれていて出されていなかったのを、美也子さんの死後に見つけて息子さんたちが先生に届けられ、それに対して先生が出された返書）は、同じような立場に身を置く者として、非常に感動した。

本の内容についてはこれ以上触れないでおきたい。ただ、決して故人の追悼だけではなく、家族愛や人類愛に溢れる素晴らしい一冊であるということは伝えたい。副題にある『いま・ここ』を「生きた」美也子さんの姿が生き生きと浮かび上がってくる。梅原君を知る人のみならず、縁あってこの拙文を読んで下さった方々にも是非お読みいただきたいと思う。